

酔っ払い女

牝牛2匹と、人間5人の一行は、ようやく黒沢にたどりついた。当初の計画ではバードはここに泊る予定だった。しかし、まともな宿屋はなく、民宿となっている農家は、不健康そうな池之端にあり、家の中は暗く、囲炉裏の煙が立ち込めていた。煙たいわりには、蚊やアブなどさまざまな虫がうごめいている。バードはぐったり疲れていたが、やっとのことで口を開いた。

「イトー、私には無理。ここには泊られないわ。もうひとつ先の村まで行きましょう」

「わかりました。掛け合ってみます」

イトーは、案内人を探しに出かけていった。

バードは、石に腰かけ、いったいこの当たりの人々は、どうしてここまで貧しいのだろうと考えていた。回りに集まってきた子供たちのあたまにはみんなブツブツができていて、目は赤く腫れている。女はみな、赤ん坊を背負い、小さな子供も、よろよろしながら子供をおぶっていた。そして、そして身に付けているものといえば、木綿のズボンだけ。上半身は裸に近かった。

イトーが戻ってきた。

「いやあ、もう暗くなるってんで、なかなかこの先まで案内してくれる人はいません。

案内料、2倍出すからと言ったら、ようやく人がみつかりました。今、出かける準備してますので、しばらくお待ちください」

そんなやりとりをしていると、目の前の道をひとりの女が歩いて行った。美人ではないが、ブスでもない。年齢をとっているわけではないが、そう若くもな

い。そんな女がフワリフワリと歩いていく。顔がほんのり赤い。バードを見つけると、話しかけてきた。

「ORADAGA TSUTTA DOBROG NOHOUGA ZET
E UMEZO! SAGURAGAWA MO SUNGEZO。OMEMO A
GAONIMIDENAOKKANE KAWOSITENEDENOND
EMME！」

女は、小さな盃をバードに差し出した。

「イトー、この人何言ってるの」

「方言が強くて、よくわかりません。とんでもない酔っ払いです」

イトーは大きな声で女を追い払おうとした。

「Go away--This drunk woman。」

イトーは酒を一滴も飲まない男だった。

「I hate alcohol！」

酒も飲まないイトーが真っ赤になって怒鳴った。

「それは残念ね。It's a pity that a man like you can't drink alcohol」

そういうと、女はまた、ふわりふわりと歩いて立ち去った。

急に東京弁と英語で話しかけられたイトーはきよとんとしている。

この日、黒沢村では女達が集まって、自分たちの作った酒、どぶろくを持ち寄って味見をしていた。村では、一軒一軒がどぶろくを作る。麴1，ごはん2，水3の割合でまぜ、カメの中に入れておく。酒の発酵がまるるとき、一晩だけこたつなどで温めるが、あとは放っておき、時々かき混ぜてやると1週間も



すれば、お酒のよい香りがしてくる。一軒一軒で作るとぶろくの味は違う。酒を作る女たちの手についた酵母によって、味が決まるといふ説もある。

この日の夜は、村の若者が柳の枝に「虫送り」と書いた札を下げ、「虫送るわ！」叫んで、害虫を村から追い払う行事が予定されていた。終わってからの酒宴の準備もかねての利き酒会だった。この時期は温度管理が難しい。温度が高すぎて、発酵がどんどん進み、せっかくのどぶろくが酸っぱくなってしまふのだ。

集まったのは「数人ほどの村の女たちだ。」

「梅雨時だといっても、だんだん、暑くなってきたな」

「あったかくなると、酒が早くできていいんだけど、すぐ酸っぱくなつてな」

盃に一人一人、自分が作ったどぶろくを入れて回してのむ。それぞれの味が全く違う。

「これは、あんまり酸っぱぐねえな」

「わがりますか？ 実はおらん家の裏から、清水が湧いてで、これが冷たいんさ。」

清水にどぶろくを入れてみたら、すっぱぐねえんだ」

女たちはおしゃべりをしながら、利き酒を続けていく。
と、そこに村では見慣れない女が現れた。

「わたしは、小国の酒蔵から来ました。桜川というお酒を作っています。みなさんの作るお酒がおいしいということは分かっていますが、造り酒屋のお酒も味わってみてください」

そういうと、徳利から盃にさっさと酒を注いでいく。白く濁ったどぶろくとは違い、透明の酒だった。

一口飲んだ女が言った

「これはうめえ！ どぶろくとはまた違う。さすが酒蔵だなー。どうやって作ったんだ？」

「ありがとうございます。これは雫といって、特別な作り方を使います。清酒とどぶろくの違いは酒を濾すかどうかですね。普通はどぶろくをしぼって、清

酒にするのですが、これは違います。酒を入れた布の袋を天井からぶら下げ、そこから落ちてくる雫をためたのがこの酒です。名前は雫とつけました」

「そりゃあ時間かかるわ。雫が一滴ポタッと落ちて、しばらくしてまたポタッと落ちて。どぶろくも搾ればカスが取れて、しばらくカメの中においとけば、清酒みだいに透明になる」

「んだども、ポタッポタッって落ちて来る雫を待ってるほど暇ではねえよ」

「うんだ、うんだ！」

爆笑に包まれた。

利き酒会では、冷たい清水につけたどぶろくと、桜川の雫が優劣つけがたい第一位の酒として選ばれた。



酔っ払い女を見送ったあと、イトーは石の上に腰をおろし、両手で顔をおおっていた。不思議に思ったバードが声をかけた。

「どうしたの？気分でも悪いの？」

「どうもこうもありませんよ。あんな酔っ払い女をイギリス人のあなたに見られて。恥ずかしい限りです」

「日本では女性が酔っぱらうことは多いのですか？」

「横浜にも、そういう女はいます。でも、普通の女は酔っても出歩いたりしませんやまとなでしこはどこへいったんだ！」

「どこにお酒を買うお金があるの？お酒は普通、男が飲むのでしょうか？」

「はい、月末の代金支払のとき、その金で酒を買ってしまう女がいるのです。米やお茶のつけを払ったのだと、ごまかすのです」

「バードは、酔っ払い女がふらふら歩いて行くのをみてため息をついた。

「これが礼儀の国、日本の現実か」

イトーが声をかけた案内人がやってきた。さて、次の峠を越えねばならない。バードが、休憩代として小銭を渡そうとすると、店番の女性は一銭もいらぬという。どうしてかと聞くと、飲んだのが水だけなのでお金はもらうわけにはいかないとのこと。

「バードは、このつつましさ、この正直さこそ日本人の女性だと感心した。

イトーがさらに聞くと、店番の女性が答えた。

「実はさっきの女の人が、小銭を払ってくれたんです。外国から来た客人は大事にしてくれと。確か名前は、おかやさんと名乗っていました」